

---

アポロンとパン

—シニョレツリ《牧神の王国》についての一試論—

---

ルカ・シニョレツリ (ca.1450-1523) による《牧神の王国》(ベルリン、カイザー・フリードリヒ美術館旧蔵) がさまざまな解釈を喚起させる作品であることは確かであり、19世紀後半から現在に至るまで——1945年に焼失した後も、メディチ家とフィチーノのアカデミーを背景に、この絵画の主題を明らかにしようとする多くの試みがなされてきた。とりわけ、前景はもとより背景にも描きこまれた多数の人物によって、先行研究は第一に、描かれた人物が各々誰なのか、第二にどのようなテキストを典拠としているのかを主要な論点とし、そうした考察に基づいて、総合的な絵画の意味を明らかにしようとしている。

本発表は、これまで挙げられた典拠を前提として認めたうえで、この作品の解釈に新たな考察を加えることを目的としている。カイザー・フリードリヒ美術館のカタログ(1909)によれば、作品の最大の特徴は、太陽の光に照らされた部分と、光が届かずに暗い色彩で描かれた部分との色彩のコントラストであることが示されている。そこで発表者は、この田園の情景のなかでこれまで看過されてきた二つのモチーフ——「月」と長い影によって暗示されている「太陽」に着目したい。先行研究においては、空に浮かぶ三日月や人物が落とす長い影から、描かれた情景が日没であることに言及があっても、その理由は夕暮れの情景でおわることの多いウェルギリウスの「牧歌」からの影響、もしくは時を示唆するモチーフのひとつとして説明されるにとどまっている。しかしながら、作品全体の印象を左右する月と太陽、この二つのモチーフが併存することの象徴性はより大きな意味をもつように思われる。

この作品は焼失したとはいえ、ロレンツォ・ディ・メディチのために描かれた可能性のある数少ない作品のひとつである。ロレンツォに近い人文主義者マルシリオ・フィチーノは、惑星と人間との相互連関を信じていた。各惑星は神々と結びつけられ、属性としてその惑星の影響を受ける人間の気質や土地、役割が与えられた。さらに月下界の神であるパンと、太陽神アポロンは、音楽を奏でることによっても人間に影響を及ぼす。かつてシャステルは、この作品をロレンツォ本人の詩と結びつけて解釈し、その後の研究者も作品と詩との関連を言及している。しかし1460年代以降のフィレンツェにおけるパンの称揚／復権の一方で、アポロンがダフネ＝月桂樹を愛するゆえにロレンツォの神であるという事実を踏まえるとき、別の解釈も浮かびあがるだろう。ここでは、ロレンツォがこれらの神をどのように位置づけていたのか、彼の詩にみられる思想とこの作品にみられる思想との共通性を示すことで、作品と詩との関連を異なる側面から捉えなおしていく。パンが象徴しているものだけでなく、アポロンが象徴するものを考慮することで、ロレンツォ本人にとっての作品の意義を示したいと考える。